アレルギー性紫斑病

➢ 症状

全身の細い血管がアレルギーにより炎症をおこし、血管が破れ出血する病気です。血管性紫斑病、シェーンライン・ヘノッホ紫斑病とも呼ばれます。3 歳から 10 歳ぐらいまでの男の子に多い病気です。発症する前に約半数が上気道感染（溶連菌感染症など）の後に発症すると言われています。最初は下肢を中心に紫斑（赤色の小さな斑点）から始まります。紫斑は隆起している場合もあります。紫斑は時間が経つにつれて、青や紫色に変わっていきます。普通の発疹と違って紫斑は圧迫しても消えません。紫斑は上肢、体幹、顔面に広がることもあります。他の症状に関節痛、腹痛があります。関節痛は通常両側性で膝、足関節に多く認めます。消化管に炎症が起こると、腹痛を認めます。臍の周囲を中心とする痛みで、断続的で強い痛みを伴います。ひどくなれば血便を認めることもあります。

➢ 治療

圧迫で紫斑が出現するので、運動は控えて安静にしましょう。関節痛に対してはアセトアミノフェンや湿布等で治療します。強い関節痛、腹痛に対しては入院してステロイドの投与が必要になります。

➢ 予後

紫斑は出現、消退を繰り返し 1 ヶ月程度で軽快します。再発する場合もありますが、予後のよい病気です。合併症に腎炎があります。紫斑出現 2～4 週間後に血尿、蛋白尿を認めることがあるので、尿検査を定期的におこないます。一般的に腎炎がなければ 6 ヶ月間の検尿で終了とします。急性期は運動制限が必要ですが、紫斑が改善すれば登園、登校は可能で普通の生活ができます。

上田小児科・外科